

---

# 平行黙示録

茶釜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平行黙示録

### 【Nコード】

N6561S

### 【作者名】

茶釜

### 【あらすじ】

学園黙示録の世界に送られた主人公。

チート無しの、あるのは原作知識と、一年間の準備期間だけの一般人が生き抜くために努力する話。

## プロローグ

はじめまして、木山優と言います。  
入社三年目のサラリーマンです。

さて、私は今少し困った状況にいます。  
まあ、一言で言ってしまうえば「テンプレ乙」というやつです。

今私の目の前にいるご老人が神様だそうです。  
神様が言うには、私はすでに死んでいるそうです。

「それで、神様が私に何のようですか？」

「単刀直入に言わせてもらおう。  
君、うちで働く気ない？」

……何言ってるんでしょう

「申し訳ありません、うちで働くとはどういじ……」

「簡単に言うとは神様の手伝いをしない？ってこと。

神様の仕事って言うのは一言で言うと、平行世界の管理なんですけど」

「平行世界ですか？」

「そつ、ifのストーリーなんて言い方でもいいよ。

元々は平行世界っていうのは保険みたいなものなんだよ。

一つの世界が何かの理由で無くなっても、もう一つの世界が新しい

平行世界を作りながら営みを続けるっていつ」

なるほど、しかし……

「なぜ私を？」

「日本人だから」

は？

「世界の営みが続くほど平行世界も増えるからね、人手不足で新しい人材を探してたら、日本人が一番適応できそうだったから」

「意味が良く……」

「アニメやマンガなんかも平行世界の一つなんだよ。得意でしょ？日本人はそういうの。」

同人誌や二次小説なんか平行世界の平行世界だね、ここまで神様の真似事をしている人材はいないよ」

たしかに作り話が平行世界の一つだと言うのなら、日本人ほど多くの世界を作った人種はいないだろう。」

「なるほど、話はわかりました。」

それで、神様に手伝いをするとしたら私はどうなるのですか？」

「正確に言うと、君は直接神の手伝いをするんじゃないなくて、実際に人間に神の補佐が務まるかの被験者になってもらいたいんだ。」

報酬に来世の幸せと君が残してきた家族の幸せを保証してあげる」

「被験者？」

「そう、実際に平行世界で生活してもらって、それに耐えられるかをテストするの。」

補佐とはいえその位できなきや管理者なんて務らないからね」

ということは、それなりに厳しい環境の世界に送られるわけか、平和な世界でテストになるとも思えないし。

それでも……残してきた家族に罪悪感はある、幸せが保証されるなら。

「やります」

「そう、それじゃあ君が送られるのは『学園黙示録』の世界。」

ちなみに君には親の遺産で暮らしているニートになってもらうよ、最初から守ってくれる保護者や、助け合える仲間がいたらテストにならないから」

それを作るのも含めてのテストというわけか。

「ちなみに、君が送られるのは原作開始のちょうど一年前だから、頑張って」

その言葉を聞き終わると、不意に意識が途切れた。

## 第一話

目が覚めると知らないマンションの一室にいた。

周りを見渡すと家具以下に何も無い部屋と、机の上に通帳と財布、携帯電話が置かれていた、おそらくこれが設定にあった「親の遺産」なのだろう。

通帳を開いてみると、原作開始までの一年間くらすには十分な金額が記載されている。

最後の振り込み元が保険会社なのは少し気になるが……

「とりあえず買い物行くか」

まずは今日の食事を買うに行かなくては。

とりあえずパソコンと家具だけはあった、……逆にそれ以外はなにもしなかったが。

「とりあえず明日は服や日用品を買うに行かなきゃな」

とりあえず買い物から把握できたことは、周辺の地理と私がいた部屋は床主市内のマンションの三階で、主人公達が通っていた藤美学園とは少し離れている位だ。

そして私は今食事を終えて、自室内を探っているのだが

「見事に何も無い……」

とりあえずパソコンと家具だけはあった、……逆にそれ以外はなに

もなかったが。

「とりあえず明日は服や日用品を買いに行かなきゃな」

先に必要な物のチェックをしなかったことを後悔しながら、パソコンを大手通販サイトに繋いだ。

「まずは武器や非常食、保存水なんかを集めなきゃな……」

この世界の元ネタである『学園黙示録』は生前？に読んだことがあるが、原作開始までの一年間にしっかりと準備をしなければ生き残れるのは難しいだろう。

神様は平行世界に耐えられるかがテストだと言っていた、つまりこの世界で生き抜ければ合格ということだろう。

「とりあえず、合格目指して頑張りますか」

死にたくないしね。

## 第二話

学園黙示録の世界に来てから数日、とりあえず体力作りのランニングがてら、周辺の地理の把握とハンヴィーの置いてある家を探すことに時間を費やしていた。

とはいえ、元々サラリーマンだった私にそれほど体力があるわけもなく、原作開始までの課題は多い。

今日のノルマをこなし家に帰ると、冷蔵庫からミネラルウォーターをとりだし、パソコンの前に座ると大手通販サイトにアクセスする。

「とりあえず非常食と医薬品、木刀や特殊警棒なんかの武器に、奴らが部屋に侵入できないように窓ガラスが割れなくなる防犯シートを注文して……」

一通り注文を終えると電源を切り、今後の計画を練る。

「やっぱり一人で生きていくのは無理があるし、原作主人公達との合流は必要か……」

最初は主人公達以外の仲間を探すことも考えたが、その場合どんな人間が集まるかわからない以上、ある程度性格と能力がわかっている主人公達との合流が望ましいだろう。

「そうになると、いつ合流するかなんだが……、学校から脱出するときか、SATの隊員の家の前か、高城家からの脱出後か、シヨックピングモールでか……」



原作をシヨッピングモールに立て籠るまでしか読んでないので、思いつくのはこの辺りだが、もう少し考えてみる必要があるだろう。

……原作開始の三週間前になった。

今日はレンタル倉庫に食糧や武器、医薬品などの物資を運び込んでいる。

もちろん拠点となる自宅にもかなりの量の物資を確保しているが、何らかの理由で自宅から脱出しなければならなくなった時に物資を失ってしまわないようにするためだ。

「本当はもう一部屋マンションを借りられればベストだったんだけど…」

現在二トで保証人もいないため、マンションを借りることはできなかった。

「よつと、これでラストか」

物資の運び込みを終え一息つく

「ハンヴィーのある家は見つからなかったけど、それ以外の準備は整ったな」

結局校医の友人宅を見つけるのは諦め、主人公達に介入するのはそれ以降にした。

「もうやることもないし、家に帰って計画のチェックでもするか」

原作開始が目の前で近づいていた。

### 第三話 原作開始

キヤアアアア！

外から悲鳴が聞こえてくる、とうとう「奴らが発生」したのだ。

「といっても、しばらくは何もやらないわけだが」

正直な話し、私は「奴ら」よりも人間を恐れていた。

こういった異常な状況下では、必ず暴徒化する人間が出てくる、暴徒化した人間は「奴ら」と違い知恵が回り、行動が読みづらい。

暴徒達に襲われるのを避けるため、生存者がある程度避難が完了するか、「奴ら」に変わるかするまで拠点であるマンションの一室から外に出る気はなかった。

「今日明日にはほとんどの人間が高城沙耶の実家に避難するのもわかってるわけだし、動くのはそれからだな」

一年間の準備期間で物資も十分に集められたし、ドアや窓の補強も済んでいる。

「とりあえず外の連中に気づかれないように、今日は静かに過ごすか」

世界の終わりの一日目は、とても穏やかに過ぎていった。

## 第四話 合流前編

二日目になった。

私は今、高城沙耶の実家近くに隠れている。

ちなみに装備はボウガンと特殊警棒、それと小物が数点だ。

今日起きることは原作通りであれば、高高度核爆発による電磁パルスを浴びた電子機器の故障と、主人公達の高城家脱出だ。

私は悩んだ結果、高城家脱出の直後に主人公達と合流することにしたのだ。

そのためこうして高城家の近くに隠れているわけだが……

(怖い怖い怖い、いくら音をたてなければ、「奴ら」に気づかれな  
いとはいえこの環境は心臓に悪いな)

周囲を「奴ら」が徘徊している状況はあまり嬉しくなく、状況が動くまでジリジリと精神が削られるはめになった。

カッッ！

しばらくすると空が一瞬強く光った。

携帯を確認してみると、画面には何も表示されておらず、高高度核爆発が起きたことを確認できた。

(これで状況が動くな……)

数分後

ドオオン！

爆発音が響いた。

（あー、そういえばダイナマイトとか使ったんだっけ？）

爆発音が聞こえてきたということは、主人公達がもうすぐ高城家を脱出するということだ。

……ほどなくしてエンジン音が聞こえてきた、少し離れているが、十分に先回りできそうだ。

（いたいた、良かったまだ全員いる）

原作ではここで二手に分かれるが、その前に合流したかったのだ。

（まずはこっちに気づかせなきゃな）

声を出して呼びかけるわけにもいかないため、ボウガンで主人公達の近くの「奴ら」に狙いを定める。

パシュツ……パシュツ……パシュツ……パシュツ

できる限りの速さで主人公達の近くにいる「奴ら」をしとめていった。

## 第五話 合流後編

side 冴子

高城家から脱出後バギーを走らせたはいいが、エンジン音に「奴ら」が群がり道を塞がれてしまった。

この状況を打開するには、私と小室君が囷になり二手に分かれるしかないだろう。

思わず壮一郎氏から譲られた「小銃兼正・村田刀」を持つ手にも力が入る。

覚悟を決めたその時。

パシュツという空気が裂ける音と共に、どこからか矢が飛んで来て「奴ら」の頭に刺さった。

矢が飛んで来た方をみると、一人の男性がボウガンを構えているのが見えた。

パシュツ……パシュツ……パシュツ

その男性は何度か矢を放ったが、銃器ほどには連射もできず、完全な無音という訳でもないその武器に「奴ら」が少しずつ引きつけられていく。

「誰よあれ、でぶちんの知り合い？」

高城君が彼が持っている武器から判断したのか、平野君に問いかける。

「しりませんよっ、それよりあの人数しずつ囲まれ始めてる！」

その言葉に頷き、加勢をしようと彼の方を見ると、ボウガンを撃つのをやめて、何かを遠くに放り投げる姿が見えた。

side 優

ボウガンの音に引きつけられて「奴ら」が集まってきた。

「そろそろかな？」

ボウガンを撃つのをやめ、ポケットから用意しておいた爆竹を取り出す。

「子供の頃を思い出すなあ」

爆竹を遠くに放り投げる。

パパパパパッ

破裂音が起こり「奴ら」がそちらに誘導されていく。

本当は最初から爆竹を使いたかったが、そうすると「奴ら」の進行方向に主人公一行がいたので、数体をボウガンで始末してからの使用になった。

「囲まれた時は少し焦ったけど……とにかく彼らと合流しよう」

わずかに残った「奴ら」を特殊警棒で始末しつつ、主人公達に近づいていく。

「大丈夫？怪我している人はいない？」

小声で彼らに問いかける。

「あっはい、えっと小室孝って言います。

助けてくれてありがとうございます」

(あー……そうだ小室だ、原作で周りに比べてキャラが薄かったせいで、主人公としか覚えてなかった)

「木山優だ、とりあえず移動しないか？近くに私の家がある、そこなら安全だ」

小室君は少し悩んだようだが

「我々としても落ち着いて計画を立てる必要があるだろう」

という日本刀少女……間違いなく毒島冴子だろう……の言葉に頷き

「案内してください」

こちらの提案を受け入れた。

## 第六話

「うわっ、なんだか凄いな……」

私が拠点にしているマンションの一室に、主人公改め小室君一行を案内すると、彼らから驚きの声が漏れた。

「こんなに沢山の物どうやって集めたんですか？」

銃剣を付けた銃を持った少女が質問してくる。

「運送会社の倉庫で働いていたからね、奴らが現れてすぐにそこから確保したんだよ」

まさか奴らが現れるのを知っていたと言うわけにもいかず嘘をつく。

眼鏡を掛けた少女……おそらく高城沙耶が少し胡散臭さそうな目で見ていたが、特殊警棒やボウガン、非常食が買った時に利用した通販会社の箱が大量に積まれているため、とりあえず納得したらしい。

「それじゃあ、改めて自己紹介をしようか。」

私の名前は木山優だ、ここには一人で住んでいる」

「小室孝です、さっきは助けに来てくれてありがとうございます」

そうやって順に自己紹介をしていき、原作通りの面子であることを確認する。

「それにしても凄い装備だね、本物かい？」



「奴らになつた自衛隊員から手に入れた物ですよ」

私が銃について聞くと平野君がそう答えてくる、やはり仲間の友人が不法所持していた物だとは言いつらいらしい。

「なるほどね、それで君達はこれからどうするつもりなの？」

「とりあえず俺達の両親を探しに行こうと思ってます」

「ここだ。」

私はこの世界に来てから、生き残るための計画を練ってきた。それに彼らを巻き込むタイミングはここしかない。

「なるほどね、それで？その後は？」

「まだ考えてません、とりあえず両親と合流してから考えようかと」

「考えが甘いよ」

小室君の言葉をばつさりと切り捨てる。

「もし両親が見つかったとして周りはこの状況だ。」

両親が避難している場所の食料がつかけていたり、衛生状態が最悪だったりするかもしれない。

最悪の場合避難している場所の守りが不十分で、今にも奴らが突入しそうだったらどうするの？

合流した後に考えるなんて言ってられなくなるよ？」

「それは……、でもとにかく合流してみないと」

「仮に上手く合流できたとしても、その後は？」

合流できた両親を連れて他の仲間の家族を探す？

大勢がぞろぞろ歩いてたら奴らの餌食になるだけだよ？

それとも合流できた人から家族の所に残る？

そうすると最後の人は一人で家族を探さなくちゃならなくなるよ？」

小室君の計画の問題点を次々と挙げていく。

「いえ、私と鞠川校医、高城君、平野君、ありすちゃん家族を探す必要はないので一人になる心配は……」

見かねた毒島さんが口を挟んでくる。

「なんだ、それなら話しは簡単だ。

何人かがここに残って、私と協力して人間が住める環境を整えればいい。

そうすれば両親を見つけたらここに連れてくるだけでいいんだから、さっき言った問題は解決できる」

## 第六話（後書き）

これ以降オリジナルの展開になります。

## 第七話

私の提案に対してのリアクションはあまり良いものとはいえなかった。

「あの、俺達は同じ事をやっていた高城の家から逃げてきたばかりなんです、バリケードはしっかりしていたけど、それでも奴らに侵入されましたし、うまくいくとは……」

「ああ、君達は憂国一心会から逃げてきたのか。高城さんの実家とは知らなかったが、私の言っているのはあそこはすこし違う」

高城さんの顔をすこしうかがってから続ける

「憂国一心会には、準備する時間がなさ過ぎた、奴らが現れてすぐにかなりの人数を保護して受け入れたんだからね。

人数が多くなれば必要な食料や水の確保が難しくなるし、生活音も大きくなって奴らを集め易くなる。

何より人数が増えれば考え方の違いからトラブルが多くなって、内部崩壊の危険もある」

心当たりがあるのだろう、皆なんとも言えない表情をしている。

「だけど私が考えているのは、私と君達とその家族だけ、多くても二十人程度だろう。それなら食料の確保も難しくないし、意見のすり合わせをしてトラブルを防ぐこともできる。

何よりも家族を探している間に、残った者で受け入れの準備もできる……どうかな？」

私の提案に皆考える様子を見せるが、暫くすると平野さんと毒島さんが口を開いた。

「いいんじゃないかな」

「うむ、皆の家族と合流した後のことはいつか考える必要があったんだ、ち ようどいいかもしれない」

二人がそう言うと他のメンバーも反対はないのか、賛同してくれた。

「それじゃあ誰が残って生活の準備をするかだけど、まずはありすちゃんはここに残るべきだろう」

平野君の提案に皆がうなづく。

「それと毒島先輩も残ってください」

「私が？」

「はい、奴らに備えて戦える人が残るべきですから、家族を探す必要のない 僕が先輩のどちらかになります、僕の場合銃声で余計に奴らを集めてせつかくの隠れ家を放棄することになりかねませんし」

「なるほど、了解した」

彼らが残るメンバーと家族を探すメンバーを選ぶのを見ながら、私

は無事に主人公達と合流することができたことを喜んだ。

あっ、ジークの餌どうしよう……人間用の非常食じゃまずいよな。

## 第八話

最終的にここに残るメンバーは

私

毒島冴子

高城沙耶

希里ありす

ジーク

の四名と一匹。

家族を探すメンバーは

小室孝

宮本麗

平野コータ

鞠川静香

の四名になった。

戦闘能力の低いメンバーをここに残し、奴らに備えた用心棒として毒島冴子が残ることになった。

戦闘能力でいえば鞠川校医もここに残るべきだが、家族が避難している場所の衛生的な状況が悪かったりして、治療が必要な場合を考えて搜索組に加わった。

今は搜索組が持っていく物資を選んでいる。かさ張っては駄目だし、かといって少なすぎても不安なため、慎重に選ぶ必要がある。

「さて、メンバー分けが決まったところで考えておかなければならないことがある」

「なんですか？」

私の言葉に皆が手を止め注目する。

「考えておかなければならないことというのは、居残り組と捜索組のどちらかが自衛隊や警察の救助隊に発見された場合の対応だ」

これは今決めておかなければ面倒なことになる。

「居残り組が発見された場合、もし救助を受け入れてしまえば、捜索組が帰ってくる場所がなくなってしまう。元々捜索組が家族を探している間に、居残り組が生活環境を整える計画なんだからね」

「確かにそうね、だけど捜索組が発見された場合、受け入れた方が家族を見つけやすいわね。」

自衛隊の救助がこの辺りで行われているってことは、家族も救助されている可能性が高いんだから」

「ふむ、では問題はどちらにしても居残り組のことか」

高城さんと毒島さんが考え始めるが、他のメンバーは不思議そうな表情をしている。

「あの、単純に救助された方が自衛隊の人にもう片方のことを話して、救助してもらえばいいのでは？」

「そう上手くはいかないのよでぶちん」

平野君の疑問を高城さんが切り捨てる。



「自衛隊にとつてもE N P対策がとられている装備や燃料は貴重なはず、今後の復興を考えたらなおさらね。おそらく救助は短時間の一回きり、それも学校なんかの避難民が集まる場所に限定されるはず」

「居残り組は居場所がわかっているから、救助してもらえるかもしれないが、捜索組は東署や御別小学校にいなかった場合、どこにいるのかわからず救助は難しいだろうな」

「そうなると居残り組も救助される訳にはいなくなってくる。さつきも言ったけど、居残り組が生活環境を整える計画なんだからね」

私と高城さんの説明に皆が黙りこんでしまう。

「だけどこの問題は簡単に解決する」

私の言葉に皆が注目する。

「私が残って捜索組を待つ」

## 第九話

「残るって……俺達の為に木山さんがそこまですることは」

「別に君達のためだけじゃない、元々私は救助がきても受け入れないつもりだったんだ」

「どういうことですか？」

「自衛隊に救助されたからって絶対に安全なわけじゃない、憂国一心会のように、食料や水の確保の問題があるし、何よりも私は生きている人間が怖い。」

自衛隊に保護された安心と、自衛官相手ということでも理不尽で自分勝手な主張をする人間が必ず出てくる。もしそれで内部崩壊でもしたら、状況は今より悪化してしまう。

集めた物資は自衛隊に回収されているだろうから、何も無い状態で生き延びなければならなくなる。

そうなる位なら、物資の十分にあるここで、バリケードを作って暮らした方が安全だ」

「確かにそうね、パパ達が相手でも勝手な主張をする人間はいたんだもの。」

自衛官相手じゃなおさらね」

そして少し悩んだ後

「私も残るわ！」

そう宣言した。

「パパ達のことですんだの！この状況を生き抜くには、自分の頭で考えて行動するしかないって！それには保護されるだけの「子供」じゃ駄目だつて！」

「沙耶……」

小室君達が高城さんの決意に驚いていると

「僕も残ります！」

「平野！？」

「僕の場合は小室達の両親を探してからになるけどここに帰って来ます！」

「僕も決めたんです！もう何もできない「やくたたず」には戻らないつて！」

「平野……」

「私は残れないわ、お父さんやお母さんがいるかも知れない以上、救助を受け入れる」

「そうね、宮本さんと小室君はそうした方がいいと思う。だけど私はどうしようかしら？」

鞠川校医は宮本さんの意見を肯定しつつ、自分がどうするかは決めかねているようだ。

「私も今すぐには結論を出せないな」

鞠川校医や毒島さんのように家族を探す必要が無いメンバーは少し悩んでいるようだ。

「まあ、一人でも残ることが決まっていれば問題無いんだ、今すぐ決めることはない。

救助隊員に救助先の様子を聞いてから決めればいいしな」

それにしても、二人も残ってくれるとは。最初はバリケードを設置するのを手伝ってくれればいくらいにか考えていなかったが……これは嬉しい誤算だな。

## 第九話（後書き）

今回のキーワードは「子供」と「やくたたず」です。

憂国一心会の惨事の直後なので、誰かに保護されることに不安を感じてたりもするため、結論を出すのが早かったりします。

## 第十話

家族捜索組が出発し、我々も行動を開始する。

「さて、まずは何をやる？」

「とりあえず毒島さん達と私は別行動だ、私はまずこのマンションの管理会社に行って、他の部屋の合鍵を取ってくる。

今のままで家族捜索組が帰ってきたあと、生活スペースが足りなくなりかねないから」

「了解した、だが別行動というのは？」

「毒島さん達はこのマンションの周りにロープで簡易的なバリケードを張って欲しい。

このマンションは出入口が正面玄関だけだから、その前の道にバリケードを張るだけで安全性が一気に高まる」

「そうね、先輩が邪魔な奴らを倒して私がロープを張っていけばその位はできそうね。

ちびっこも見張り位はしなさいよ？」

「はい」

その後もテンポ良く今後の計画を発表していく。

「その後は私と毒島さんでバリケードの範囲を広げながら、第二の隠れ家探しをする」

「第二の隠れ家って？」

ありすちゃんが不思議そうにといかけてくる。

「万が一ここが使えなくなった時に逃げ込む場所だよ。

もちろんこのマンションをできる限り安全な場所にするつもりだけど、いざというときに逃げ込む場所があった方が良い」

「そうね、それであてはあるの？」

もちろんそれも一年間の準備期間に考えてある。

「近くに音楽教室がある」

「……なるほどね、確かにぴったりかも」

「沙耶ちゃんどういうこと？」

「いい？ちびっこ、音楽教室みたいに楽器を使う場所じゃあ、外に音が漏れないように防音がしっかりと施されてるの。生活音をたてても奴らがやってこないのは大きいわ」

「なるほど、だがそれなら最初からそちらに移った方が良くないか？」

毒島さんの疑問はもつともなのだが……

「無理だな」

「なぜ？」

「小室君達が帰ってきた後に増えた人数で生活するほどのスペースがない」

「当然ね、防音を施すための経費は広くなればそれだけ高くなるもの」

それに私が買い集めた物資もかさばるしな。

「それで？二人が活動している間、残される私達はどうするわけ？」

「二人には家庭菜園をやってもらう」

「は？」

私の言葉に怪訝そうな顔をする。

「いつかは食糧も尽きる時がくる、その時に備えて少しでも栽培技術を習得してもらおう。」

そのうちバリケード内に畑も作るぞ」

「そうね……いつかは自給自足できるようにならなちゃいけないんだから」

「それに応急手当やマンションの維持管理なんかの勉強もしてもらわなくちゃいけない」

医者や大工がない以上、当然のことだ。

「ありすちゃんにも勉強を教えてあげて欲しいし、そのうち本屋が



ら実用書を取ってくるからよろしく頼むよ」

「……………わかったわ」

以外にマンションに残る二人のほづがハードなのかも知れない。

## 第十一話

彼女達にバリケードの設置作業を任せてマンションの管理会社案内  
向かう途中、寄り道をして目を着けていた音楽教室に向かう。

毒島さんと共に向かう予定と彼女達には話したが、一つの懸念に対  
処する為にやっておきたいことがあったのだ。

音楽教室に到着すると、中に入り「奴ら」の人数と内訳を確認する。

(大人が8人、子供が3人、まあ十分だろう)

受付から防音処理された教室内に続く扉を開け、おそらく生徒の物  
であろう楽譜を教室内に投げ「奴ら」を教室内に誘導する。

うめき声をあげながら「奴ら」が教室内向かうが、やはり視力が  
退化しているせいか大人の「奴ら」の内の数人は、壁にぶつかり上  
手く誘導されてくれない。

(けど子供が全員教室内に入ったし問題ないか)

教室内に続く扉を閉めると、上手く誘導されなかった「奴ら」を教  
室内の「奴ら」が打撃音で反応しないように、特殊警棒ではなくボ  
ウガンで始末する。

(とりあえずこれで一安心だな)

一息つくると仕留めた「奴ら」を外に運び、ボウガンの矢を抜いて頭  
を叩き割り直す。

これで誰もボウガンで仕留めたとは思わないだろう。

作業が終わると、改めてマンションの管理会社に向かって歩き始めた。

side 高城沙耶

「あの木山って男少し怪しくない？」

電柱にバリケード代わりにロープを結びながら毒島先輩に話しかける。

「怪しい？何がだ？」

「何て言うか準備が良すぎる気がするのよ……、大量の物資といい、まるで元から考えていたみたいにすらすらと出てきた今後の計画といい」

「でも沙耶ちゃん、あの人が働いてた運送会社から持ってきたって言うってたよ？」

「うん、今後の計画も「奴ら」が現れてから一晩あつたし、その間に考えたんじゃないか？」

二人はいまいちピンときていないようだ。

「そうね、計画の方はそれでも良いわ。だけど物資の方は絶対におかしい」

「おかしいって何が？」

「車よ！物資を運んだ筈の車が無いの！」

これが私が一番彼を怪しんでいる根拠だ。

確かに通販会社の箱が大量にあつたが、それを運んだ筈の車が無く、まるで普通に通販で配達された物のように見える。

「乗り捨てたんじゃないか？EMP攻撃で動かなくなつて」

「それでもおかしいのよ、乗り捨てたならタイミング的に私達と合流する直前のはず。

万が一に備えて、もう一つ隠れ家を用意しようとするほど慎重な人なら、必ず車にも数日分の食糧を用意していた筈よ。

なのに私達っていう人手ができたのにそれを回収しようとするらしいなかつた。

まるで車が使えなくなるのが判つてて、最初から徒歩で行動してたみたいにしかおもえないのよ」

「確かにそうだが……、まさかあらかじめ「奴ら」が現れることを知っていた筈がないだろうか？」

「それはそうなんだけど……」

やはり考えすぎなんだろうか……？いくら考えても答えは出なかつた。

## 第十二話

管理会社から無事に合鍵を回収してマンションに帰ってみると、既に簡易バリケードの設置が終了していた。

「ただいま、バリケードの設置お疲れ様」

「お帰りなさい、どうですか？外の様子は？」

声をかけてみると毒島さんが迎え入れてくれた。

「良くないね、「奴ら」ばかりで生存者は見当たらなかった。避難したり、何処かに隠れていると良いけど正直望み薄だろう」

この周辺住民の多くが憂国一心会に保護されていたことを考えても、一人も生存者が見当たらないのはやはりショックではある。

……まあ、ある程度の避難が終わる頃を見計らって行動を開始したから、当然と言えば当然なんだが。

「そっちはどんな感じ？」

「一応マンションの出入口周りは塞ぎましたが簡易的な物ですから、何かの拍子に「奴ら」がまとめて押し寄せて来た場合、おそらく防ぎ切れないでしょうね」

「数体なら問題ないんだよね？」

「ええ、それくらいなら」

「それならとりあえず良しとしよう。元々必要な工具も足りないんだから」

元々工具等の類いは準備していない。

これは原作組と合流する計画だったため、警戒心を抱かせないためだ。

食糧はともかく、いくらなんでも本格的なバリケードが作れるほどの杭や様々な部品、工具が準備されていたら不審だろう。

……ボウガンなんかもアレだが、もし本当に倉庫にあった物が疑われたら、実は私自身が愛好家だったとしてもしておこう。

「足りない物は明日近くのショッピングモールに取りに行こう。君達の服も必要だしね」

「そうですね、いつまでもこの服だけというわけにはいきませんか  
ら」

「……ところで他の二人は？」

「さすがに疲れたようで眠ってますよ、……今日は色々ありましたから」

確かに、憂国一心会から逃げてきてすぐに私と合流して、バリケードの設置作業を行っていたのだから疲れて当然か。

「それじゃあ私達も休もうか。

合鍵も取って来たし、私は隣の部屋で寝るよ」

「……いえ、この部屋以外はまだ窓やドアの強化もしていませんから、今日はこの部屋でまとまって寝ましよう」

「いいのかな？」

「構いません」

少し悩んだが、結局全員同じ部屋で寝ることになった。

私は横になりながら、明日ショッピングモールで会えるだろうこの世界の友人を思い浮かべた。

…… 10ヶ月前

私は予定外な原作キャラクターと接触していた。

「あんたが木山か。田丸ヒロシだ、よろしく」

「よろしくお願ひします」

それがこの田丸ヒロシだ。

ショッピングモールで登場し、病気のお婆さんの為に薬を病院までとりにいき、そこで「奴ら」に噛まれてしまった人物。

そもそも何故こんな事になっているかというと、元居た世界で起きたある事件と、学園黙示録で主人公組が銃器を手に入れた後、平野コータ以外がろくに使いこなせていなかったのを思い出したためだ。

合流した後に暴発事故等を起こされては堪らないと思い、私も知識としては銃の扱いを知っておこうと警察や自衛隊関連のサイトを見ていると、自衛隊の訓練で電動ガンを使うことがあると知り、少しでも何かの役にたてばという理由と、ある物を手に入れるために、初心者歓迎のサバイバルゲームチームをネットで検索してみると見覚えのある顔を見つけた。

それが彼だ。

「でも最近ではサバイバルゲームに興味を持つ人も増えたよ。」

少し前まで戦争ゴッコなんて言われて嫌われてたのに、最近は専用のフィールドもあるし、今じゃサバイバルゲームの本場なんて言っていてアメリカみたいに実銃を撃てる国からわざわざ日本にサバイバルゲームの為に来る人だっているんだから」

「そのおかげで私みたいな初心者も始め安くなりましたよ」

「まあ、本格的にやろうとすると金かかるからなあ」

このチームは初心者歓迎だけあって、道具を貸し出してくれるのだ。

「電動ガンなんて5万円以上するのも珍しくないですからね。」

「ゴッグルなんかも必要なことを考えたらなかなか手を出しづらいですよ」

「そうだな、まあ今日は思う存分楽しんで行ってくれ」



「はい」

これが彼との出会いだった。

その後も何度も顔を合わせ友人と言える付き合いになるにつれ、彼を助ける事も計画の一つになった。

生き残ることが決まっていた主人公組と違い、彼は私が何かをしなければ死んでしまう。

明日ショッピングモールで彼に会い、必ず助け出す。

決意を改めて固め、眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6561s/>

---

平行黙示録

2011年12月13日01時51分発行